

「語彙と文法」共同研究プロジェクト研究会 2008 年度第 1 回

日時：2008 年 5 月 31 日（土）午後 1 時半～午後 5 時半

場所：AA 研マルチメディア会議室(304 室)

発表者：町田和彦（AA 研）

発表題目：「辞書と文字」

現在南アジア諸言語の電子辞書を構築中である。辞書で記述される言語（対象言語や説明に使用されるメタ言語はもちろん、語源情報などに関わるソース言語などすべてを含めて）の表記については、今まで必ずしも決まった約束事はなかった。実際には、印刷や電子化処理過程における経済的・技術的な現実上の制約によって決められてきた面が多い。

南アジア諸言語は、その発展プロセスの特質上、言語系統の違いも含めて多くの言語の影響を受けてきた。またそれらの言語のほとんどが固有の文字を持っていることも特徴である。こうした背景の中で、辞書記述の客観性や研究者の利便性を両立させるためには、それぞれの言語がそれぞれ（意図する時代の）実際に使用された文字そしてつづりで表記されることが望ましい。transliteration や transcription は現在も便宜的に採用されている場合があるが、経験上こうした情報は実際にはあまり役に立たないことがわかっている。たとえばヒンディー語にはアラビア文字で書かれる（書かれていた）ペルシャ語やアラビア語からの借用語彙を多く含んでいるが、これらの語彙の語源情報をアラビア文字以外の文字（たとえばラテン文字やナーガリー文字）で与えてしまうと情報の系はここで切れてしまうことになる。与えられた情報を基にさらに詳しく当時のペルシャ語やアラビア語を調べようとしても、当然のことだが、これらの言語の辞書の見出し語はラテン文字やナーガリー文字では書かれていないため直接の追跡調査ができない。辞書を含め質・量ともに優れた電子的に（本来の文字で）検索可能な言語情報資源が公開されつつある現在、記述する言語（文字）に関する表記の妥協はむしろマイナスに働くことが多い。

辞典編纂者にとって本来の文字で記述することの最大のメリットは、文字言語を文字言語のまま埋め込むことができる点にある。特に語源情報に関しては、文字やつづりの変化は音韻の変化に比べ格段に少ないため、本来の文字での語形表示は音韻表示に比べ客観性がはるかに優れている。同時に、一語一語について借用時期の同定や同時代の音声言語への配慮「本当はどう発音されていたか」など労多くしてあまり報われることのない作業から辞典編纂者は開放されることにもなる。本来こうした作業は、現代語の辞典編纂とは別の分野に属するべきものである。

今回の発表は、AA 研の招聘客員教授であるテージ・バーティヤー博士と進めている共同研究「ヒンディー語の最初の文法」の研究経過報告と関連して行われた。特に共同研究の中核的素材である 1698 年の日付のあるオランダ東インド会社の社員ケテラルによって編纂された写本の中に見られる当時のオランダ語つづり（ラテン文字）のヒンドゥスターニー語語彙の同定とその解釈を通して、これからの「辞書と文字」のありかたについて問題提起をした。なおこの共同研究の成果は今年度の AA 研出版物として公開される予定である。